

河野多恵子

谷崎文学の
愉しみ

中公文庫



中公文庫

谷崎文学の愉しみ

定価はカバーに表示してあります。

1998年2月3日印刷

1998年2月18日発行

著者 河野多恵子

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部)

03-3563-3664(編集部)

振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Taeko Kono

本文印刷 精興社 カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203060-9 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

谷崎文学の愉しみ

河野多恵子



中央公論社

谷崎文学の愉しみ

目次

生まれと育ち

初期の諸作

7

谷崎と大正六年

肯定の欲望と『既婚者と離婚者』

39

横浜をめぐって

裏返し of 私小説『神と人との間』

65

私生活の変動

大噴火の創作期（その前期）

92

私生活の変動

大噴火の創作期（その後期）

168

戦時下に在って

『源氏物語』現代語訳と『細雪』

246

最後の十年

性と死・夢と告白

278

幽界の潤一郎

法然院にて

287

あとがき

294

谷崎潤一郎作品索引

300

生まれと育ち

初期の諸作

谷崎潤一郎は明治十九年（一八八六）ろつばくきんせいひのえいぬどし六白金星丙戌年、獅子座ししざの七月二十四日に生まれ、昭和四十年（一九六五）やはり獅子座の七月三十日、数え年八十歳で没した。因みに、生まれた日と亡くなった日が同月同日（一説によると一日ちがい）だったというシェイクスピアを最たる例として、創造的な世界で豊穡に生きた人たちには、生まれた日と近い日に亡くなっていることがよくあるという。谷崎もまさしく、そうだったことになる。

谷崎潤一郎が二十代の半ばで世に現われた時の華々しい迎えられ方は、幾人もの人が書いているが、たとえば、六歳下だった佐藤春夫は「潤一郎。人及び藝術」（昭和二年三月号「改造」）のなかで、その作品がへどういふ譯であれ程旺んな勢ひで世に迎へられたか、論拠に今少しの見落しはあるものの、一応の様相を知るには重宝な次

のような論述をしている。

へ凡そ明治四十年前後の我が國の文壇程平坦で無味淡白に近い世界を文學の上に喜んだ時代は珍しいことであらうと思ふ。へ平凡でありふれたことでなければ文學となり得る生活ではないかのやうに言ひふらされてゐた。へ(略)明治四十年代の吾々の文學は凡ての飛禽啼鳥を皆鷄にして了はなければ置かないやうなものであつた。へこの呪はれた地面を匍ふだけの鳥に啼聲を與へたものが永井荷風の出現であるとしたらば、縛められてゐた双つの翼をこの匍ふ鳥に與へたものは實に我が潤一郎であつた。へ即ち無限的空想或は空想的構想と主觀的情熱と色彩的誇張とそれに描寫的力説等を以て彼の文學の旗印にした。しかも彼がその旗印を進めてゆくところは自然主義の文學者が恐る／＼開拓した所の性的官能の世界であつた。人々はその中に飛翔する鳥を見、然もそれが極樂鳥のやうに華美なのに眼が眩んだ。人々はこの無意識の中に豫想してゐた——といふのは彼等がそれとは氣付かずに渴望してゐた文學本來の姿を見て、それを文學的の廣い見地からすれば一種退化してゐた所の自然主義的作品と對照することによつて一層驚嘆を深くし、知らずに求めてゐた所のものがその慾望を覺醒されると全く同時に當の慾望を満足させるそのものまで直に與へられた喜びの爲めに、彼に對

する感謝と稱讃とは二倍になつた。〉（略）時代が人を作るのでもなく人が時代を作るのでもなく、その間の關係は正に鐘と撞木の間が鳴つたのである。〉

谷崎文学は、今日においても現代文学の先人の位置を占め続けている。自然主義文学こそ文学本来のものとする考え方が、実のところ今なお消え去ってはいないからである。この考え方は書き手と読み手のどちらにも相当の広さで、変形しながら根強く巢喰っているのであって、このことが現代文学の自由な豊かな發達に何かと水を差す恰好になっているのである。

自然主義文学とは、一言でいえば、人生いかに生きるべきかを問う文学のことである。一見、非常に立派な命題のようであるが、この命題のもとで捉えるならば、人間性と人生とは卑小化して描かれるしかなくなる。人間性と人生にきわめて浅いところで妙に生真面目に結びついたものになるからである。

多くの日本の文学がもっているこの不幸な性格は、今日の新人たちのベストセラー作品などにも、形を変えて見て取れるものが多いのに驚く。彼等が好んで書く命題は、実はやっぱり生き方なのである。自然主義文学時代の個が対峙せしめられたところの家、階級、社会、文壇などが、家庭、学校、組織、集団、物質文明、マスコミ、外国

などへと相対化、拡大化したために、対峙すべき相手の本命がどれだか掴みきれなくなり、生き方を対峙においてではなく、風俗のうちに求めることになる。より新しい風俗上の生き方が、新しい生き方であり、真実の生き方と考えられているようである。彼等のそのような文学は、風俗上の新しさと驚かせることはあっても、個性の新しさはなく、文学的衝撃を与えるには到らない。

谷崎文学の何よりの魅力は、潑刺とした生命感に溢れていることである。人間性と人生との底知れない秘密、不思議さ、意外性を強烈な個性で一作ごとに新しく認識し、力強く表現している。谷崎文学の分つ感動は、読者の人間性の最も深いところに引き起こす感動なのである。

まず、谷崎文学の最初期の作品のみならず、生涯の全作品中でも代表作の一つとなっている『少年』（数え年二十六歳。——以下すべて数え年により、発表時の作者の年齢を示す。また、掲載誌月号を暦月と扱う）は、まことに潑刺とした生命感に溢れる魅力に富んだ文章で書きだされている。そうであるのは、春の午後の日射しや少年というものが、生命感に溢れたものであるからではない。その一見さりげない書きだしが、程なく人間の一人であることの激しい歓びを覚醒させられそうな前触れではち切れそう

になっているからなのである。

因みに、書きだしの部分に、へばかくへうらくへばたくと重ね言葉の形容語が三つも入っている。小説作法では、この種のお座なりの形容語は用うべきではないとされている。が、丹羽文雄先生から、「そういうことをよくよく心得切った上で、その種の形容語が最も表現力を発揮して作品を豊かにする場合もあるので、その場合は使うがよい」と私は教えられたことがある。谷崎のその三つの形容語はまさしくその好例であろうと思われ、この書きだしの、この文章の、その部分では、きっかり、たっぷりとはまっている。

ところで、『少年』の〈私〉は同級の塙信一、その妾腹の姉、上級生で塙家の馬丁の息子の仙吉の荒々しい遊びを通じて、彼等のうちにある異様な傾向を識る。自分の内部にも、それを自覚されるようになる。〈私〉が塙家へ行くたびに、稲荷祭の日にはじまった四人のその種の遊びはより刺戟の強いものとなる。四人は互に非道いことをしたり、されたりして、新しい、珍しい遊びを次々に発見してゆく。谷崎の数少ない生涯の友のなかに、坂本小学校時代の同級生で事業家の笹沼源之助という人がある。『少年』の舞台である塙邸は大きな洋館もある広大なものとして描かれているが、『お

『艶殺し』（三十歳）の邸と共に、向島小梅町にあった笹沼家の別邸をモデルにしたものだそうである。

『少年』の三人の少年のうち、ある状況から〈私〉と仙吉とが光子に対して、全くおとなしい一方になってしまふのは、そんな遊びがはじまって一カ月も経ってからのことである。二人はまた、信一をも光子に服従一方にさせてしまふ。そうして、〈次第に光子は増長して三人を奴隸の如く追ひ使ひ、〳〵長く此の國の女王となつた。〳〵

『少年』に描かれている少年たちの遊びは、マゾヒズム、サディズムの雛型といつてもよい。そして、谷崎文学における主人公の多くはマゾヒストあるいはそれに近い傾向の男性である。この作品ではまた、光子が良家のお嬢さまではあるけれども、妾腹の娘として設定されている点にも注目しなくてはならない。谷崎は登場以来、代表作で言えば『痴人の愛』（三十九―四十歳）のナオミまで、作中の女性主要人物には、妖婦的、娼婦的女性を挾んでおり、彼女たちは一括して言えば、くろろうと 玄人っぽい女性と呼んだほうが、更に当てはまるように思われる。『少年』の少女光子にしても、『悪魔』（二十七歳）『續悪魔』（二十八歳）の中産階級の女学生である照子とその母親にしても、資質としてくろろうと 玄人っぽいのである。

塙邸の稲荷祭ではじめてそういう遊びになってしまったあとの〈私〉を描く部分に、こういう文章がある。へ／「あばよ」／と云つて戸外へ出ると、いつの間にか街は青い夕靄に罩められて、河岸通りにはちら／＼灯がともつて居る。私は恐ろしい不思議な國から急に人里へ出て來たやうな氣がして、とある。『少年』の少年少女たち——取り分け〈私〉は何と明るく健康であることだろう。彼等の遊びが異常ではあつても、多くの子供たちのやりかねないただの度外れの遊びとの地続きにおいて描かれているためばかりではない。谷崎文学の命題が、人間性と人生とにきわめて浅いところで妙に生真面目に結びついたものになるようなものではないからで、谷崎文学は常に明るく健康なのである。

『刺青』（二十五歳）もまた、『少年』と同じく全作品においても代表作である名作で、『少年』で述べたところの魅力溢れる書きだしではじまっている。

この作品では、読みはじめて間もなく、刺青を施される者が苦しがるのに不思議に愉快を感じる若い腕利きの刺青師清吉の^{ほりものし}人知れぬ快樂が書かれてあるので、清吉にサディズムを見た氣がしかねないのだが、実はそうではないのである。もしもそうであれば、彼は自分の注文通りの美女の肌^ほに自分の魂を刺り込むという四年がかりの宿願

が、憧れ通りの娘（近く芸妓として出ることになっている）を得て遂に叶えられるようになった時、娘の苦しむのを嗜虐せずにはいられないはずなのである。ところが、彼の懐には嘗て和蘭醫から貰った麻睡劑の壘が忍ばせてあつた。∨のであり、彼は娘の苦しみを見ないのである。

あるいは、その前に清吉が「肥料」^{こやし}という題の画幅を娘に見せるところがある。

画面の中央に、若い女が櫻の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃^{たふ}れて居る多くの男たちの屍骸^{むくろ}を見つめて居る。娘はその絵を見まいとするが、やがて、お察し通り、自分はその絵の女のような性分を持っているのだ、と白状する。清吉に自分のそういう性分を引きだされそうになるからこそ、恐ろしくなつて帰りたいのである。刺青は娘のその性分を取り巻いていた臆病な心から解放する。男を「肥料」にする美しい残酷な女の身心ともの清吉における創造願望が、この作品のテーマである。その願望の根底に被虐願望があることは申すまでもないのだが、それについては極度に筆を省略すること、この作品は鮮烈に完成度をかち得ているのである。なお、この『刺青』をはじめ『富美子の足』（三十四歳）『瘋癲老人日記』（七十六―七十七歳）など、谷崎文学には男性主人公が女の美しい足に執着、拝跪する例が幾つもある。

『秘密』（二十六歳）は、谷崎文学の仕組面から見た特色を知るうえからも、見逃せない作品である。大正九年「改造」に四度にわたって発表された谷崎の『藝術一家言』（三十五歳）のなかに、次のような論述がある。——「へ組み立てと云ふと、或る靜的狀態——或る形を想像するが、形よりは寧ろ力である、緊張し切つた力の持ち合ひである。」へ藝術は事實の記録ではなく美を創造するのであるから、其處に生み出された美は一箇の生物いきもので——一箇の有機體でなければならず、既に生物である以上それはそれ自身に於いて統一された完全なものであり、部分は全體を含み全體は部分を含まねばならない。部分が成り立つと同時に全體が成り立ち、全體が成り立つと同時に部分が成り立つ。」

このことが終始当てはまるのは、音楽の場合なのである。そして、谷崎文学の仕組は、実は決して建築的なものや話の筋式のものではなくて、音楽の場合のこの印象の機能に最も近いのであり、仕組というよりは機能と言いかえるべきものである。『少年』や『刺青』の書きだしの力強い魅力にしても、音楽のよい曲の始まりと同じ機能をそなえているせいでもあるのだ。書きだしに限らず、谷崎文学の一行一行の魅力もまた音楽の場合と同様に、単に一行ごとからのみ生まれているものではない。全